提　灯

提灯は行灯(あんどん)から考え出されたもので、外室用の折たたみ行灯ともいうべき当時の発明品であつたであろう。

行灯（あんどん）は行（歩）く灯火の意味で、往古には夜道を行くにたづさえてもち歩きした。鎌倉時代にはすでに行灯が用いられていたので、最初は主として夜道を照らすために使つたのであるが、だんだん形その他に変形を加えられて、江戸時代以前から専ら室内の灯火用に使われだし、明治時代にランプが渡来してから徐々にすたれていつたが、それまでは盛んに用いられたものであり、その種類も丸行灯、小形の枕行灯、廊下用の金網行灯、花街の街頭の誰哉(たそや)行灯など種類もいろいろあつたのである。

誰哉(たそや)行灯はかどぐちにかかげるもので、今でいえば街灯にあたるもの。江戸吉原西田屋甚右衛門の抱芸者たちや、京都より来りて全盛の名高かりしが、ある夜、深宵、家に帰らんとして、途にて人のために殺害せられた。依つて用心のため、町中行灯をかかぐるに至り、これがたそや行灯の始めであるという。

遠州行灯という丸あんどんは、小堀遠江守の創作によるという。

提灯は桃灯とも書いていたようで

（朝野群載）に応徳二年（約八百六十年前）十月三十日

〃法定院仏聖供灯油料状〃に

安置二仏像一之前無桃灯柱

の記事が書かれているところからみれば、この時代にすでに提灯らしいものがあつたようである。しかし実際は室町時代に松脂、蠟燭が用いられ、それから籠提灯ができたといわれている。天正（信長時代）の頃、胴が蛇腹

になつて、おりたたみのできる箱提灯が発明されたのであるから、籠提灯が提灯のはじめであるという説が一般に行われているのであると（事物起源考）が伝えているが、一番最初にだれが考えついたかは明かでない。提灯には蠟燭が必要であるが蠟燭は古くは動植物の蠟や固体脂肪を原料としてつくつたので、この種の蠟燭はわが国でも奈良朝時代につくられており、五十代桓武天皇が山紫水明の地京都に遷都せられてから、六十代醍醐天皇（約千三十年前）の延喜、延長に至る平安時代の前期頃には宮中、仏閣などで一般的に用いられたとあり。

（徒然草）最明寺入道のくだりに（約七百年前）・・・

　肴こそなけれ人はしづまりぬらむ、さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給へとありしかば、しそくさしてくまぐまを求めしほどに台所の棚に小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、これぞ求め得てさふらふと申ししかば、来たりなむとて、心よく数献におよびて、興に入られ侍りき、其の世にはかくこそ侍りしか……

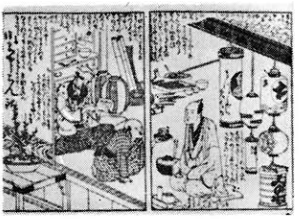
と、あるところからみれば当時紙燭、脂燭（今の蠟燭の前身）のあつた事が知られ（源氏物語）にも同様のことをみることができる。

平安朝時代、上流社会で用いられた紙燭（しそく）は松の木を細く割つてその一端を焼いて焦がして脂（あぶら）を塗つたもので急にあかりがほしい時などに火をつけて使つたといわれる。

焼けぼつくいには火がつきやすい、とはこの意によるという。

夜道の提灯の前身は松の脂の多い部分を裂いて束ね、これに火をつけた松明（たいまつ）であろうか。

伊弉諾尊（いさなぎのみこと）が伊弉再尊（いさなみのみこと）に面会すべく黄泉国に行つた時、四面がまつ暗なので、湯津瓜櫛の雄柱をひつかついで、



江戸時代の提灯屋

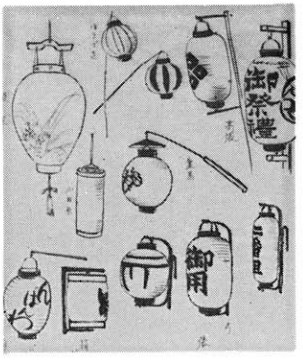
ぶら提灯

弓張提灯

高張　提灯屋

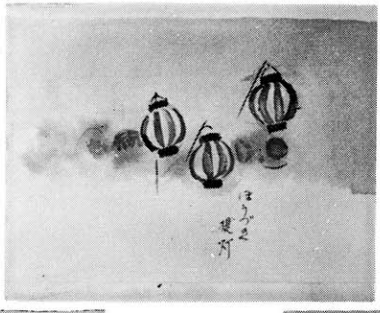
ゆみ張

提灯のいろいろ



岐阜提灯

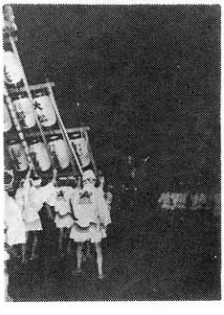
乗馬提灯



ほうずき提灯

箱提灯

小田原提灯



右　宵宮十二灯
左　京都都おどり

これに火をつけたのが松明の起源であるといわれているが、藤原、鎌倉時代には庭などを照すために、地に植えた、柱松などもあつた。

提灯や行灯の源は神社に灯明を供へる石灯籠に始まつたともいわれている。

石灯籠は始め支那から渡つて来たもので、わが国最古のものは、大和国当麻寺金堂前の一基だといわれているが、これは白鳳十年代の造営と推定されており、わが国に渡来した時はすでに献灯として宗教的意味をおびていたのであり、奈良の春日神社には古い時代のさまざまな石灯籠が残つている。

木の框に紙を貼つて下方に長い柄をとりつけ、火を点じるようにした万灯は続日本後記に

六月十五日万花会、十月十五日万灯会以二此両日一毎年修之立為一恒例一

とあるので奈良時代からあるものであつて、聖武天皇の天平十六年十二月八日、一万灯を金鐘寺と朱雀大路にともしたのが始めだといわれている。事の起りは万の灯明を点じて、衆の罪を被うという事によるのである。

吾妻鏡に

文治六年七月十五日、丁卯、今日盂蘭盆の間万灯会を勤修せられる。

とあり、藤原定家の著したものに

寛喜二年七月十四日近年民家、長竿を立て、その末梢に灯籠を設け紙を貼し、灯を挙ぐ、遠近これ有り、遂年其数多く、流星、人魂に以る。

とあり宮廷が先に行い、民家へと波及したのであろうといわれる。

万灯で有名なものに池上本門寺の日蓮宗のお会式がある。

日蓮宗は建長五年日蓮によつて開宗されたものであるが、日蓮は最初、天台に出家し真言、禅、念仏に心を傾け開祖伝教大師の精心に還れと主張し天台円教の法華経を説いたのである。

妙法一元の宗旨を立て立正安国を説いたのであるが、その後弟子の間に幾派も生れ、八派の教団が対立し各々本山をもつていたが、今日では身延山久遠寺を総本山とし池上本門寺、京都妙顕寺、本国寺、中山法華経寺を四大本山と呼んでいる。

日蓮は晩年大森で宗旨を説いたが弘安五年十月十三日六十一歳で没した。

弟子の日朗が師の遺業をついで開いたのが長栄山本門寺で毎年行われるお会式は日蓮上人の忌日に行われる儀式である。

この日信者達はうちわ太鼓を打ち鳴らし万灯を振りかざして三里、五里の道を本門寺迄練り歩くのであるが遊び事の少なかつた昔は、宗旨に関係のないものも一つのリクレーションとして参加した。万灯も思い思いに意匠を凝した花万灯がいりかい、数十万の人出で沿道の民家は、鳴り響く太鼓の音に夜半迄寝る事も出来なかつた程の賑いであつたが、現今では昔日のおもかげはない。

完全と思われる提灯の作られたのは鎌倉時代の末期、或は室町時代の初期であろうといわれている。

有名な岐阜提灯は慶長年間尾州候が徳川幕府に年々献上したので有名になつたものであるが、始めは岐阜の民間人が白張したのを尾州候で花鳥をえがいて、将軍に献上した。盆の七月に岐阜提灯をつるす習慣は、文政、天保年間からといわれている。

和歌山の提灯の製造は元和元年（約三百四十年前）頼宜公が一朝事ある場合に備えて製作せしめた事に始まる、とあるが豊臣秀吉が大阪本願寺あとに壮大華麗な大阪城を築いて居城とさだめた時、京都、堺の大商人を強制移住させたと同じように、諸大名は自己の勢力下に商工業者を従属せしめんとして諸役免除其の他の特典を与えて、彼等を自己の城下町に招致し地方物産の奨励に努力した時代があり、それが今日に到るも発展を続けているものが少なくない。

提灯を語るについて小田原提灯の名は小田原評定と共に、あまりにも有名で小田原の名を普及させた、二大双璧ともいうべきものであろう。

豊臣秀吉が天下統一の事業として、大軍をひきいて、当時関東一円を支配していた小田原の北条氏政、氏直の父子を包囲したのは、天正十八年三月のことである。秀吉の軍勢と一大決戦を行うべきか、退いて和を結ぶべきかを、永く評議していて、和戦いづれの好機をも逸してしまい、あえなく秀吉のために滅亡させられてしまつた。

爾来成果のない協議を小田原評定というようになつた。

小田原提灯は、提灯としては、最も古い歴史があるようで、三徳という特長をかかげている。

一、提灯の骨が普通のは丸く削つてあるが小田原のものは角になつているので糊付の面が広いため湿気にあつても容易に紙が離れない。

二、折畳が小さくなつて携帯に便利である。

三、上蓋の木は道了山の霊木をもつて製作するから深夜及び山道にても狐狸怪異に出遭わぬ

というのである。

北条時代に関東の文化を一身にこの小田原に集めたのであるが、天下の嶮の箱根越えは大変な難所であつた。そこで小田原提灯の三徳という様に色々と工夫がほどこされた。とりわけ提灯は夜使ふものであるので〃深夜、山道にても狐狸怪異に出遭わぬ〃という点は、事実は兎も角当時の旅行者にとつて魅力であつたろうと思われる。

これが江戸時代になつて箱根越の馬子や駕籠かきが使い始めてだんだんに武家にも使用されるようになつて有名になつた。当時の提灯は現在の懐中電灯、ライトに比すべきものであつたであろうが、時代の推移は如何ともしがたく、現在小田原の提灯屋は駅前に一軒現存して居るのみである。

小田原提灯は小さく折畳むように作られており、紐で下げて使用する構造の為め、弓張提灯の如く下に置いて使用する事が出来ない。下に置いても弓張のように立たない、その（立たない）を捉えて昔の洒落者が精力減退の男を（小田原提灯）或は（小田原）又は（提灯）などと揶揄したものが今に通用している。

提灯を昔、信州で火帛と呼んだ地方があつたものか江戸酒落本軽井茶話道中粋語録に

てうちんがめつからねへとつてさがさつしやるから、
何(あ)んだと思つたら火帛(ひんぶくろ)の事さ・・・・・

とある。

提灯の種類としては、高張、弓張、乗馬提灯、岐阜提灯、ぶら提灯（柄付、柄なし）ほうづき提灯（紅白）小田原提灯、箱提灯などがあり、形の上からの呼名も様々で、その上各種とも大小の別があり、また骨の針金のものやビニールを貼るものまで多種類にわたつており、古くは提灯のガンドウの使われた時代もあり高輪泉岳寺に

は赤穂義士の使つた鉄製の弓張りがある。

現今においては提灯の実用される事も少ないので、その名前も形も忘れられていると思われるが、芝居狂言によつて今でも使われている「実物」を見る事が出来る。

歌舞伎劇の

（鈴森対澤杭）　鈴ケ森の場で播随院長兵衛の持つのが〃小田原提灯〃で

（仮名手本忠臣蔵）　五段目山崎街道で千崎弥五郎の持つのが、弓張提灯（丸）で

〃　お軽の父与市兵衛が持つて出るのが〃小田原提灯〃である。

（勢獅子）で獅子頭の両脇にたてるのが〃高張〃で

（籠釣瓶花街酔醒）　吉原中の町見染めの場で花魁八ツ橋の道中の時、男衆の持つて出るのが〃箱提灯〃で

（三人吉三巴白浪）で土佐衛門伝吉の持つて出るのが〃弓張（細）〃で

（与話情浮名横櫛）で下男中助の持つのが〃ぶら提灯〃丸の柄つきである。

現今でも、提灯実用の一例に山間僻地などで夜道の歩行に提灯が用いられており、都会においても、警察官が弓張提灯を持つて夜の交通整理をしているのを見かける。文明の電気光線の錯綜する中に、この提灯の光りは一種異つた古風なおちつきを感じさせるのも、面白い現象である。

弔提灯は昔の天蓋屋、後の葬儀屋が、棺桶から造花、位牌、人夫などと共にととのえる。提灯を白紙で張り、高張の如く造り、葬式の先頭にささげて行く提灯である。古の葬送は必ず夜陰に行い、炬火を以つて道を照した遺風であるという。また、ぼん提灯も昔は家のかどぐちにさげたので芭蕉の句に

ゆふ風やぼん提灯も糊ばなれ

がある。

江戸時代本所七不思議の一つに（堅川の送り提灯）というのがあり、夜中に通りを見ると、前方に必ず提灯の灯が見えるので、追いつこうと進んで行くと、それに従つて灯も前へ前へと逃げて行つて、何処まで行つても追つくことが出来ない。

とある。

土手の提灯は芝居の茶屋場などにおいて、木の頭などにつけてうたう。

どての提灯吉原ばかり月夜かな、書いたかしくは、鈎針か、つられてくる、くるくるくるわの五丁まち、

さあ、わいわいのわいとせ

という唄

提灯は昔は各家毎にいくつかは必ず備えてあつたもので、明治二年十一月二十三日に（無提灯夜行禁止）という法令も出て居り、当時は都会でも、夜道は暗かつたので江戸時代の洒落本にも

・・・・・声からしれし　うかれ女の　咡（ささやき）・・・・・

とあつて、顔はみえないが声でなじみの男が知れるの意で当時の夜の暗さが知られる。そのため夜の外出には提灯なしでは歩行出来ず、電池の出来る迄は最も便利なものとして一般に利用されたものである。また明治時代に辻で客待ちする人力車夫が冬の夜、蹴込みに腰かけて両足の間に提灯をはさんで、股火鉢の代用にしている姿がよく見られたものである。

現今では実用よりも盆提灯、納涼、装飾、宣伝、お祭などに利用されており、最近少量ながら輸出もされているとの事である。

秋田で秋田美人とともに有名な竿灯まつりがある。

竿灯まつりは八月六、七日に行われる行事で起源は藩主佐竹氏の治世以前からのものといわれる。

秋田美人については領主佐竹氏はもと水戸の領主であつたが、慶長五年の関ケ原の役に徳川方に協力しなかつたため秋田二十万石に左遷されたのである。当時京の伏見にいた佐竹義宣は、水戸へ急使をたたせるとともに家臣をしたがえて秋田へ直行した。急報をうけた水戸は大変な混乱ぶりであつた。常陸太田には義宣の父義重がいたが秋田へうつる時に家臣とともに常陸太田の美女をみんな秋田へつれていつてしまつた。そのため太田には美人がいなくなり、秋田には美人が多くなつて、後世秋田美人の産地になつたという。

特に宣伝、装飾、お祭などに、この提灯によつて効果的に趣を添える場合が多く、祭礼などには提灯を主にして行われる行事もある。

竿灯まつりは四十六個の提灯をつけた竿灯(かんとう)数十本が、はなやかに市街を行列して、この竿灯を頭や肩、腰に支えてあやつる妙技をみせる秋田名物の七夕竿灯まつりや、京都の祭りにつきものの十二提灯も見ものであり、京都の都おどりをつなぎ団子の提灯であらわすのに対して、鴨川おどりは鴨川千鳥の意味から波に千鳥の提灯で飾る。このように今は実用以外の事にも多く用いられ、特に夜の行列には、祝賀にせよ示威運動にせよ、提灯なしでは全く意気が揚がらない。

今は芸者置屋や鳶職、遊芸師匠など木遣くずしの

格子造りに御神灯さげて

は見当らなくなつたが、小料理屋などの目じるしの提灯はネオンと違つて何んとなくその感覚が郷愁を感じさせる。これは看板であり実用品である。従つて今もなお提灯は実用品、必需品というべきであろう。

提灯は（提灯に釣鐘）といつて釣鐘との極端な対照物として、ものの対照のたとえにされているが、浅草観音本堂正面の大提灯は直径四・五メートル、長さ五・五メートル、目方が四百キロ以上もあつて、大きさも重量もまたその姿も中々普通の釣鐘に負けていない。

提灯に釣鐘負ける浅草寺

君ふかくほほづきなりのちやうちんに身をつりがねの片おもひかな

提灯の著名な産地としては岐阜、名古屋、福岡、水戸などが知られている。

提灯の製造にとつて竹の乾燥は最も大切であり、提灯の木型に竹骨を巻いて、この竹骨へ刷毛で米糊か、わらび粉糊をつけて紙を貼り、その上から別の刷毛、或はブラシの乾いたものでコスルのであるが、傘用刷毛の如く一定の定まつた寸法でなく、大きさも形も極めて多種にわたる為め使用する刷毛も一定していない。